

糖尿病の早期発見と対策

自治医科大学 内科学講座 内分泌代謝学部門
教授 矢作 直也

糖尿病は我が国で約1千万人、全世界では5億3千万人が罹患しているとされ、さらに2050年には13億人にまで増加すると予測されており、糖尿病との戦いはまだまだ長く続くものと考えられています。そのような中、我々は指先自己穿刺で得られるわずかな量の血液からHbA1cなどを正確に測定可能な装置を糖尿病早期発見に活用することを2010年から提唱し、取り組みを続けてきました。2014年には「検体測定室」という正式な国のしくみが作られ、薬局を中心に現在約1,800箇所の検体測定室が全国で開設され、運営されています。

本講義では、糖尿病の早期診断・治療介入の重要性について改めて最新のエビデンスに基づいて論じるとともに、そこへの検体測定室の活用についてお伝えしたいと考えています。またQRコードを用いた検体測定室データのPHR(personal health record)への取り込みや、それを活用した医療データ連携についての最新の試みについても紹介予定です。

糖尿病を始めとする生活習慣病はサイレントキラーとも言われ、自覚症状が初期の段階では乏しいことから見過ごされがちですが、そうであればこそ指先検査のような身近で行える検査をフルに活用して早期発見を促し、重症化予防へと繋げていくべきであり、検体測定室の活用がさ

らに広がることを期待しています。

《講師略歴》

氏名 矢作 直也（やはぎ なおや）

《学歴及び職歴》

1994年 東京大学 医学部医学科 卒業
1996年 東京大学 医学部 第3内科 入局
2008年 東京大学大学院 医学系研究科 分子エネルギー代謝学
特任准教授
2011年 筑波大学 医学医療系 内分泌代謝・糖尿病内科
准教授
2023年 自治医科大学 医学部 内科学講座 内分泌代謝学部門
教授

《代表的著作》

『糖尿病診断アクセス革命』（2010年、サイカス）

『筑波大学附属病院とクックパッドのおいしく治す「糖尿病食」』
（2013年、講談社）

実験医学増刊『遺伝子制御の新たな主役 栄養シグナル』
（編集：2016年、羊土社）